

周辺から 見る「EU」

二〇〇四年EU拡大をめぐって

特集にあたって

——ヨーロッパ連合（EU）の東方拡大

EUは、今新しい局面を迎えている。本二〇〇四年五月一日、チェコ、キプロス、エストニア、ラトヴィア、リトアニア、ハンガリー、マルタ、ポーランド、スロヴェニア、スロヴァキアの一〇か国が正式加盟国となり、加盟国数が一挙に二五か国に増加した。こうして巨大化した機構運営の簡素化・効率化、合意形成の迅速化などを目指して議論されてきた欧州憲法に関し、六月一八日、欧州首脳会議は最終的に合意に達した。

EUにとって第五次拡大となる今回の拡大により、EUは人口約四億五五〇〇万、GDP約九兆六一三〇億ユーロ（二〇〇二年名目値）の統合体となった。アメリカに匹敵する経済圏の誕生である。こうした規模の点からだけでなく、旧東欧諸国を対象としているという点からも、この第五次拡大はこれまでの拡大とは比較にならない政治的・経済的インパクトをもつ。それだけに、この拡大の実現には多くの関門が存在し、それ以前の加盟交渉に比べてはるかに長い期間が費やされた。

コペンハーゲン理事会でEU加盟へのハードルとしていわゆる「コペンハーゲン基準」が示されたのは一九九三年六月のことであり、正式の加盟招請が行われた二〇〇二年二月の理事会（同じくコペンハーゲンで開催）までには、約一〇年の歳月がかかっている。二〇〇二年当時議長国を務めていたデンマークのラスムセン首相の「一つの欧州が生まれた」という発言には、旧東欧諸国のEU加盟によって、冷戦期に東西に分断されていた欧州の再統一を進め、欧州のみならず、世界の平和と安定に寄与するという期待が込められているとみるべきだろう。

こうして拡大したEUは、国際政治・経済において、従来以上の重要な勢力になることは疑いがない。しかしそれは二五か国の意見調整がうまくいって一致団結できれば、という条件つきである。地政学的にも歴史的にも多様で、しかも経済水準も異なる二五か国間の調整はそれほど容易ではない。先に述べた欧州憲法草案採択の遅れは、主としてスペインと、とりわけポーランドの強い反対を原因としており、すでに内部調整の困難さは表

面化しているといつてよい。

なかでも外交・安全保障政策上の不一致に対する懸念は大きい。イラク戦争に際して、イギリスを除いて慎重な対米協調が目立った現加盟国に対し、新加盟国の親米的態度が際だったことは記憶に新しい。ヨーロッパの安全保障に対するアメリカのコミットメントを強く期待する中東欧諸国にとっては、共通外交安全保障政策（CFSP）や欧州安全保障防衛政策（ESDP）についてNATOとの関係で難しい選択を迫られる可能性もある。他方で、いわゆる「新旧」ヨーロッパの相違は、対アメリカではなく、対ロシア政策においてこそ顕著である、といった意見も聞こえてくる。拡大したEUは、ロシアだけでなく、ベラルーシ、ウクライナ、モルドヴァや中東諸国と域外国境を接することになる。これらの不安定な国々と国境を直接接し、経済格差の大きな隣接地域を持つのは新規加盟国であり、おのずから対応に違いがでてくるであろう。

国内の政治・経済問題も予断を許さない。現加盟国にとっては、旧東欧諸国からの安価な労働力

流入、経済水準が相対的に低い旧東欧諸国の援助対象国化（あるいは被援助国化）、共通農業政策（CAP）の新規加盟国への適用の是非など、懸念材料は山積している。その一方、加盟に向けてのハードルを越える過程で国民の負担が増大し、結果的にさまざまな社会問題が顕在化してきた新規加盟国は、こうした「つけ」を、EUから少しでも多くの予算を獲得することで返したいと考えている。さらに今回の拡大からもれた国では、これまでの人的・経済的交流を妨げる障壁がつくられ、繁栄するヨーロッパから取り残されることに對する不安の声もある。つまりEU拡大は、さらにその外側に新たな分断線を引くことに他ならない、という危惧である。こうした論点は、各国に共通なものもあるし、ある国に特有のものもあるが、いずれにせよ、これまで加盟交渉に全エネルギーを傾けてきた中東欧諸国の中で十分議論されてきたとはいえない。

本小特集では、EU拡大をめぐるこうした期待と不安を、新規加盟国であるチェコならびにエス

トニアとラトヴィア、そして今回加盟を実現した国々よりもはるかに以前から加盟に名のりを上げていながらそれを果たせずにいるトルコを対象に、具体的に考察する。チェコ、エストニア、ラトヴィアの三か国では、二〇〇三年に実施された国民投票で加盟反対論の強さが証明された。また、拡大直後に実施された本年の欧州議会選挙では、EUに對する新規加盟国国民の関心の低さが如実に表れた。こうした国々を内部に取り込むことはEUの今後にとって何を意味するのであろうか。政治的・経済的統合を深化しつつあるEUに對し、これらの国々は国民国家とEUとの関係の確認を改めて迫っていくだろう。他方、トルコとの加盟交渉の開始を引き延ばすことは果たして得策であらうか。そしてトルコが「待たされている」とすれば、その最大の障害はEU側にあるのか、それともトルコ側にあるのか。

EUの拡大は今回が最後ではない。扉の向こうでは、さらに多様な国々が列に並んでいる。EU拡大は常にヨーロッパが新たな問題に直面する過程である。二〇世紀にはじまったヨーロッパ統合

は二一世紀にどのような未来図を示すことができるのか。それはヨーロッパだけの問題ではあるまい。拡大に一区切りがつき、本体の機構改革が進められているいま、ヨーロッパに「戻ってきた」

国とヨーロッパの仲間入りを目指す国がEUにどのような問題を突きつけているのか、地域の側から見てみよう。

(小森宏美)